

〈葛藤的男性〉とはどのような男性なのか
—ケアをめぐる男性の行為と意識の錯綜—

○ 多賀 太 (関西大学)

石井クンツ昌子 (お茶の水女子大学)

伊藤公雄 (京都大学 (名))

研究の背景と目的

近年の国際的ジェンダー平等政策では、「ケアリング・マスキュリティ」をキーワードとして、男性のケア行為参加を通じたジェンダー平等の促進が目指されているが、そうした効果は限定的との先行研究もある。報告者らは、本報告に先立ち、就学前の子どもを持つ父親のデータを用いて、ケアに関わる行為と態度、ジェンダー観、生活の質に関する各指標の相互関係についてクラスター分析を行い、①〈伝統的タイプ〉(ケア行為の頻度は低くジェンダー観も伝統的)、②〈非伝統的タイプ〉(ケア行為の頻度が高くジェンダー観は非伝統的で生活の質も高い)以外に、③〈葛藤的タイプ〉(ケア行為の頻度もケアの態度の程度も高いにもかかわらずジェンダー観が伝統的で生活の質が低い)の存在を確認した(多賀他 2023)。最後の〈葛藤的タイプ〉は、ジェンダー平等施策の目標に照らせば、ケア行為参加の点では理想的であるものの、女性との非支配的で平等な関係性の構築やメンタルヘルスといった観点から見れば決して望ましい状態とはいえない。彼らに対する有効な政策的働きかけのあり方を考えるには、彼らの生活実態をより詳しく理解する必要がある。しかし、報告者らのこれまでの研究では、彼らの特徴として分かっているのは、正規雇用および中程度以上の収入の配偶者を持つ男性や 20 代の男性の割合が高いことだけである。そこで本報告では、家事・育児行為に限らない家庭内外の様々な生活実態や人間関係に関する側面を上記 3 タイプで比較し、〈葛藤的〉タイプの特徴をより詳細かつ多面的に把握したうえで、彼らに対して必要な政策的アプローチについて考察する。

使用データと分析方法

(公財) 笹川平和財団「新しい男性の役割に関する研究会」が実施した「男性の役割に関する調査」(2018) の日本データ(東京・東北・北陸・九州・沖縄に在住する 20 歳~69 歳の男性 1,000 名ずつ合計 5,000 名)のうち 7 歳未満の子どもをもつ既婚男性のケースに限定して使用する。クロス集計により、上述の 3 クラスター別に以下に述べる諸変数の分布を比較し、〈葛藤的〉タイプの特徴を明らかにする。

結果

(1) 交友関係に関しては、「自分の親」「自分のきょうだい」「その他の親族」「近所の人」「仕事以外の友人」との会話頻度が他タイプに比べて高い傾向にあり、社交性の高さがうかがえる。(2) DV, セクハラ, パワハラのいずれについても、加害経験・被害経験ともに他タイプよりも多い傾向にある。これは、彼らが実際により暴力的な環境に置かれてきた可能性だけでなく、より暴力に敏感であることの反映である可能性も考えられる。(3) 家事・育児頻度が高いゆえに予想される結果ではあるが、「ボタン付け」ができて普段の服や仕事着を自分で買う割合が高い。そして、育児休業取得経験者の割合が高く、子どもの緊急時の対応が配偶者ではなく自分の役割である割合も高い。(4) 配偶者との関係性については、他タイプに比べて、平日の会話が多い傾向にあるが、会話パターンとしては「自分が一人で話す」割合が高い。「家計管理」「親や親族とのつきあい方」「子どもの教育や子育て方針」については、配偶者よりも自分が決定している割合が高い。そして「配偶者は自分に関心がない」と思う割合が高い。(5) 老後の生活については、他タイプに比べて、楽しみが「かなりある」割合が高く、一緒にいたい人として「配偶者」を選ぶ割合は低く「子ども」を選ぶ割合が高い。(6) 特に注目すべき点として、他タイプに比べて、「現在中心になって介護している」「現在介護を手伝っている」「過去に介護を行っていた」のいずれも割合が高く「ダブルケアラー」状態の割合が相対的に高い。

謝辞

本研究は(公財) 笹川平和財団から個票データ使用の許可を得ており、JSPS 科研費(25K03385)の成果の一部である。

主要参考文献: 多賀太・石井クンツ昌子・伊藤公雄・植田晃博「ケアする男は「男らしい」のか—ケアリング・マスキュリティの複数性に関する計量分析」『家族社会学研究』35(1):7-19, 2023.

(キーワード: ケアリング・マスキュリティ, 葛藤的男性性, ダブルケアラー)